



明石 洋子

(あずさの会)

幸地域訓練会
のBの会です

忘れちゃいけない…兄弟児のかかわり

幸保健所日吉分室の一室を間借りの頃の幸地域訓練会に、生まれたばかりの政嗣をおんぶして、二歳の徹之の手をひいて通い始めたのは、昭和50年冬、もう13年も前のことです。

お産で福岡の実家に帰った時、私の母（小児科医）が、「発達のバランスにずれがある」と言うまで、私は徹之の障害に気がつきませんでした。川崎に戻り、母の「子供の集団に入れ、刺激を多く」のアドバイスで、地域訓練会の門をたたいたのです。

政嗣の誕生は、徹之の療育のスタートでした。徹之の訓練を受けながら、「障害がある故に特別な指導と配慮は必要だけれど、それ以上に大切なのは、人間としてあたりまえに、家庭で、地域で生きていくこと」と思いましたから、当然弟も兄と同じ保育園・小学校、そして療育キャンプも言語訓練も、また水泳・スケート・ピアノ等も、いつも一緒でした。日常生活も、訓練でも、弟はどんなりばな療育者よりすてきな先生になりました。どろんこも、プールのシャワーも、スケート靴も、徹之は状況の認知が不得意で、新しい場面ではとても恐怖心を持ちましたが、いつも一緒にいる弟がニコニコと笑顔でやる姿を見ては、安心して真似することができました。

でも、親として政嗣に強要したつもりはなかったのですが、赤ちゃんの時から先生役が身につけてしまったのでしょうか、ある日、買物の帰り道、公園でブランコにのって遊んでいた時のことです。私がい忘れに気づき、ブランコに夢中の二人を置いて、目の前の店に入りました。ところが、徹之が突然ブランコから降りてしまい、「テッチャン、イッチャダメ！」と、政嗣は呼びながら私の置いていった買物袋を両手にかかえて、徹之を追いかけました。私はその光景を目にし、飛んで行って政嗣を抱きしめてしまいました。徹

之5才、政嗣3才の時のことです。私は無意識のうち、弟に負担をかけていたようです。

それ以来、共に行動する時は、兄は兄なりに、弟は弟なりに、精一杯楽しめるように心がけ、キャンプやスケート教室・水泳教室も障害を持つ子だけでなく、兄弟児も楽しめるようにと考えて計画しました。兄弟児が十分幸せでなければ思いやりも育たないでしょうし、兄弟児が十分に理解しないと社会の人々への理解は程遠いものになるでしょう。

思うに、本当の幸せとは何でしょうか。子供の苦勞を親が肩代りして、子供がラクしてカッコよくなること、つまり過保護にすることではありません。政嗣の人生は、甘いものではないでしょう。親より苦勞するかもしれません。だから、私が徹之を育てながら充実した時をいつも持つことができたように、弟にもたくましく充実した人生を歩んで欲しいと思っています。つまり、本当の幸せはラクをすることではなく、充実した生き方ができることだと思います。骨を折らない（努力をしない）ような仕事には、充実感はありません。苦勞した分、充実感を味わえるでしょう。つまり、くことで物ごとを深く考え、失敗や恥をかくことで人を暖かく見ることができる…、それがその人の人間性をより豊かにするでしょう。人より苦勞が多い分、多くのことを学び、より大きく成長するのではないのでしょうか。

63年2月に印刷発行されたばかりの読書感想文集に、政嗣の文が夢見崎小学校より代表に選ばれ、市のコンクールに入選して載りました。

政嗣はこの本をSF小説と思って買ったのですが、実はおじさんは知恵遅れで、つい兄の将来がだぶって見えたようです。その感想文をつけ加え、弟の気持ちを直接伝えたいと思います。

昭和63年2月25日記 (徹之中3. 政嗣小6)

幸地域訓練会の文集「幸」にOB会長として寄せた厚稿です。
その文集より、63年10月の「かまぐるま」に転載されました。1988年10月

「おじさんは原始人だった」を読んで

明石 政嗣
(夢見崎小学校6年)

ぼくは今、現代の文明の力をかりなくては生きていけないような生活をしてしまっています。そしてまた、科学の発達した現代こそすばらしく価値のあるものと思っていました。

この本は、人間とはなにか、進歩とはなにかを考えさせてくれました。

自然と一体になって生きているおじさんに山で出会った勇氣君は、おじさんのことを原始人のように思え、み力を感じていたのです。ところが、町の中で見たおじさんはみすばらしく無力でした。おじさんのすばらしさは山での生活の中で発きされても、町の中では通用しないのです。人間はすばらしい科学や文明を手に入れたかわりに、木の実を取り、鳥や虫たちをながめ、自然をうやまう気持ちをわすれているのではないのでしょうか。おじさんの価値がうけいられないのは、おじさんの問題ではなく周りの問題ではないのでしょうか。

文中で遠藤先生が「世のなかには、おとなや子どもや老人がいるように健康な人も障害のある人もいます。よりかかりっこして、社会というのをつくっているんだ。いつ自分が不幸にまきこまれてもいいように、あまった力はだしあわなくちゃいかん。つよい人間だけが役だつのだなんて考えかたをもったら、生命にたいするぶじよく、神にたいする思いあがりだ。」と言っていました。そういえば、『人』という字はおたがいによりかかった形をしています。人は助け合って生きていかなくはいけないんだと思いました。おじさんが勇氣君の学校の友達から攻げきされるのを見た時、弟



のゲンは、おじさんをかばったけど、勇氣君は、二人をかばうどころか、にげだしてしまいました。ぼくもこういう立場に立たされたら同じようににげだしそうです。後で自分の勇氣のなさ、心の弱さに傷つくでしょう。ぼくには、障害を持った兄がいます。父も母も遠藤先生と同じ考えで、兄をぼくといっしょに育ててきました。将来、みんなが生きている社会の中で兄も生きていけるようにと考えているのです。もしおじさんが原始時代に生きていたら、かくりされることもなく、自由に野山を駆けめぐり、知恵と勇氣に満ちたすばらしい人生があゆめたでしょう。おじさんは現代社会のルールも言葉も知らなかったのです。この社会で生きていけず保護され、かくりされてしまいました。ぼくがおとなになった時、ふつうの社会からかくりされて、自由にできずに、しばらく生活をおくるなんてとてもがまんできないことです。母が、兄に「基本的な生活習慣や社会のルール、そして会話を一つ一つ学習させて、将来、『自分の生活を自分の意志でつくりだしていく』そんな人生をあゆませたい。」と言っていた意味がよくわかりました。ぼくも、障害のある人や弱い人でも生きていけるような社会になるために努力できるおとなにならなくてははいけないのです。そのためには思いやりと勇氣と実行力が大切だと強く思いました。

書名 おじさんは原始人だった
文庫名 偕成社文庫
著者名 大原 興三郎
発行所 偕成社

さて、「徹之の将来像は？」と言うと、本人は、「高校に行って、大学に行って、働いて、(結婚して)お父さんになる」と言っています。でも先日(2月16日)、ドラマ化された『ダイアリー(読売テレビ・女性ヒューマンドキュメンタリー)』の主人公が、「養護学校に行きたくない。皆と同じように高校に行きたい」と願い、何度も挑戦しては断われ、「ばってん、高校に行きたかぁ」と叫んでいましたが、徹之も現在全く同じ心境です。

徹之が徹之らしくのちいばい生きていけるよう、高校という徹之の希望するあたりまえの社会を与えて欲しいですね。対話と社会性が乏しくても、数学の大好きな明るい素直な子です。きっと楽しいクラスになりますよ。毎日、「高校に行ける？」と私に心配そうに尋ねては、「がんばります」とせせせと勉強しています。

高校の先生、どうぞよろしく!

この時期でも高校の受験を2月25日記
とこもさせてもらうはつて 7